

## 灌頂儀礼にみる成仏保証の構造

—唐代瑜伽部密教の灌頂儀礼を例に—

田中悠文

「はじめに」

空海によってわが国へ伝播され真言宗として開創された真言密教は、「即身成仏」を至高の目的としている。「即身成仏」は、不空三蔵が、それ以前に唐へもたらされ流布していた、いわゆる旧訳『陀羅尼密教』を、『金剛頂経』(Vajra-sekhara)なる聖典によって理論的に再構成した唐代瑜伽部密教の実践儀礼を具体的手だてとしている。

空海は、唐に渡り、その当時不空の事実上の後継者の立場にあつた青竜寺東塔院の恵果阿闍梨に入門し、不空の密教をその実践儀礼の骨子に据えた密教法門を体系的に受法したといわれる。

先に述べた様に、唐代瑜伽部密教は『金剛頂瑜伽経』なる聖典を根本としている。具体的には、灌頂を入門とし、本尊瑜伽の修習に励み、ブツダとのきわめてリアルな一体感が得られたならば、此の世において「速疾成仏」することを、その儀礼構造の主眼としている。空海は、その「速疾成仏」の理論を、「即身成仏」の名のもとに『即身成仏義』・『弁頭密二教論』・『秘密曼荼羅十住心論』等の著作において再構成している。

そこで本稿では、空海の構築した真言密教の実践儀礼の構造を読み込むための基礎作業として、その母胎となった唐代瑜伽部密教の実践儀礼、特に灌頂儀礼がもつ成仏保証の構造を、不空の『理趣釈』・『五秘密儀軌』等を例に考えようとする。

一、『理趣釈』と『五秘密』

不空の構築した唐代瑜伽部密教の実践儀礼は、いわゆる『初会金剛頂経』(Tattvasaṃgraha)の「金剛界品」中に説かれる「灌頂」「瑜伽」「成仏」というシステムを源流としている。しかし、実際の密教儀礼は、『初会金剛頂経』よりも後に成立した『vajrasekhramahaguhya<sup>1</sup>yogatantra』の影響下にある『金剛頂瑜伽中略出念誦法』・『蓮華部心念誦儀軌』・『金剛頂瑜伽護摩儀軌』等に依拠している。

これらの儀軌書は、いずれも訳とはなっているが、筆者が現在までに行ってきた文献研究上の見地からいえば、抄訳、もしくは抄訳をもとに増広した傾向が一樣に顕著にみうけられる。その好例として挙げられるのが、今回の研究で重視される『大乗金剛不空真実三昧耶経般若波羅蜜多理趣釈』(大正一〇〇三・P六〇七)である。

⑦『理趣釈』の主張

『理趣釈』は、いわゆる略本『理趣経』(不空の場合は同訳『般若理趣経』大正・二四四)といわれる『百五十頌般若波羅蜜』(Adhyardhasatīka prajñāpāramitā) / Arya-prajñāpāramitā-naya-satapañcasatīka)をモチーフとして、『Tattvasaṃgraha』・『vajrasekharā』・『Trailokyavijayamahākara<sup>2</sup>paraja』等を用いて、不空三蔵が巧みに儀軌化・教理化を施して成立したものである。また、不空は『華嚴経』・『瑜伽師地論』・『涅槃経』・『楞伽経』等の大乘諸経

論を援用し、大乘と密教の成仏の概念は大略同じであるが、その境地に到るまでの手続きと、頓悟か漸悟かという場面で、一段と密教の瑜伽の構造・機能が効率的であることを論証しようとしている。ここでは、大乘菩薩道では三無数劫にわたって福德・智慧の二資糧を積集し成仏の因とし、それをもとにステップアップして成仏に到るとするが、瑜伽部密教では「灌頂」を門とし、「瑜伽」を修行して、「速疾」に「成仏」する成仏達成の構造中に、大乘菩薩道の二資糧が満足されるという機能が織り込まれていることを明らかにし、それによって「速疾成仏」を理論的に説明しようとしている。

### ① 「五秘密瑜伽」

さて、その『理趣釈』の成仏達成の構造における中心的課題である「五秘密瑜伽」は、『理趣釈』の序品である「大樂不空金剛薩埵初集會品」(p 六一〇a~六一〇b)において、金剛薩埵を中尊に、慾・触・愛・慢等の八大菩薩(これら八大菩薩は金剛手・觀自在・虚空藏・金剛拳・文殊師利・纒發心・轉法輪・虚空庫・摧一切魔のイメージと重複する関係にある。)をはじめ総計十七尊で構成される「大樂不空金剛薩埵十七尊大曼荼羅」として説かれた。不空は、その曼荼羅を具体的にイメージするために「般若波羅蜜多理趣經大樂不空三昧真實金剛薩埵菩薩等一十七尊聖大曼荼羅義述」を著して『理趣釈』を補完しようとした。

#### 「五秘密尊」

また、上述の「大樂不空金剛薩埵等十七尊大曼荼羅」(筆者は十七尊構成の五秘密曼荼羅とよぶ)は、宗学上伝統的に「五秘密三摩地章」とよばれる不空訳『理趣經』第十七段に「同一蓮華・同一月輪」中の「五秘密尊」として説かれている。この「五秘密」は、「十七尊構成の五秘密曼荼羅」と異なり、「十七尊」を「五尊」に集約している。この「五

秘密尊」は、不空訳と称される『金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌』（大正一一・二五・p五三五b）において、「十七尊構成の五秘密曼荼羅」を集約した究極のすがたとして強調される。

そこで、筆者は『*Tattvasaṅgraha*』に説かれる成仏の手続きを基本に、不空の『理趣釈』を用いて「灌頂」「瑜伽」「成仏」の構造の中で、「灌頂」がどのような位置付けにあるか見てみようと思う。

## 二、「眞実撰大教王」にみる成仏の構造と灌頂

不空は、『一切如来眞実撰大乘現證大教王』(skt:『*sarvatathāgatataṭṭvasaṅgrahanamahāyānaabhisamayama-karparā*』)n:大正八六五、同八八二)の「金剛界品」の内容について、

「四大品」は「四智印」によって象徴されたもので

「金剛界品」では六種類の曼荼羅が説かれ、

その第一番「金剛界大曼荼羅」は「ビルシヤナ仏自受用身」の所説であり、

そこでは、

- 1、「五相現等覺」によって「成仏」し、
- 2、「金剛三摩地」をもって発生するところの「三十七智」を現するという、速かに「菩薩地・仏地」を證する法を、
- 3、「入曼荼羅」の儀則をもって弟子に説く」と述べている（『金剛頂瑜伽經十八会指帰』・大正八六九）。

上記の内容は、

へ入「曼荼羅」↓説「五相現等覺」∨∥

初因

↑

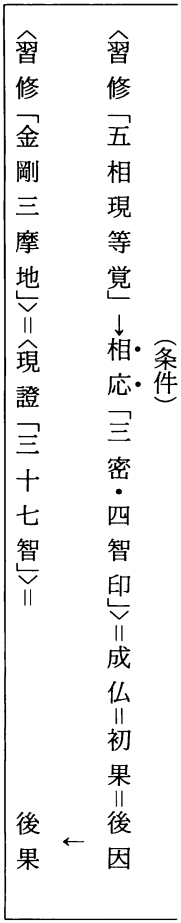


図1

不空が在来の聖典・陀羅尼・儀軌等にコメントする場合、その視点はいつも「成仏の具体的表現のための手だて」という面に据えられている。この「一切如来真実授大乘現證大教王」についても同様である。

さて、上記の図式をみれば、『初会金剛頂経』は、「灌頂」には「入曼荼羅」することによって「成仏」が保証される、という機能があることを強調していることが明瞭にみとれる。

しかし、そこには「本尊瑜伽」||「五相現等覺」の習修が成功すれば、という条件が設定されており、その関門がクリヤーされたなら現世において「菩薩地」を「證」する（筆者はこの文段の意味を「現證 (abhisamaya) 初歡喜地」と捉える）ことが出来る、という成仏の方程式が提示されている。そして、上記の条件が解決されたなら、今度は自動的に「仏地」を「證」する（筆者はこの文段を「後十六大生成仏菩提 (anuttara-samyak-sambodhi)」と捉える）ことができるのだという。

### 三、灌頂儀礼

#### ⑦成仏の構造にみる「灌頂」の機能

さて、上述の一連の実践儀礼の第一関門として、成仏保証を与えるという灌頂儀礼の機能について、不空は「理趣

『釈』巻上に『理趣経』本文の「已得一切如来灌頂宝冠為三界主」を釈す段において、

「1如来が因地（成仏以前）において灌頂師にしたがい三昧耶智曼荼羅（誓いの曼荼羅）に入った時に、

2阿闍梨が弟子（因地の如来）の身中の本有の如来蔵性を加持し、金剛加持を発することによって、

3弟子は真言行を修行する菩薩法器となる。

4その結果、持明灌頂もしくは伝授・印可等の灌頂を授与されるにあたいする器となった。これを（成仏の）初因と為し、

5三密・四智印が相応することによって最終的に三界法王主（ブツダ）と成る、これを果とする。」（p六〇七a～b）という。

上記の内容は、

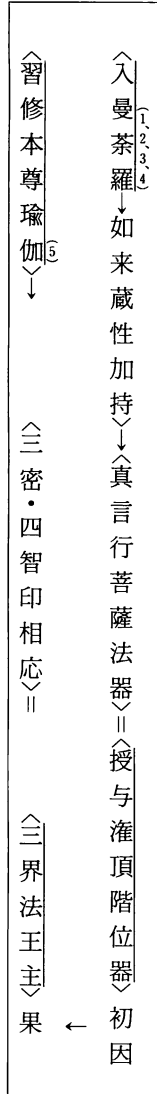


図 2

以上のように図式化される。

①本有如来蔵性

『理趣釈』によれば、上記の灌頂儀礼において、阿闍梨によって加持された〈本有如来蔵性〉は〈如来本有の清浄法界智〉をさしていることが知られる。

それは、b「常恒三世一切時身語意業金剛大毘盧遮那如来」を釈する段で

「如来のもつ清浄法界智は

1 無始以来本有であつて、煩惱に覆われたとしても減ることはなく、煩惱を滅して清浄を證したとしても増加することはない。

2 過去・現在・未来のいずれの時において、三悪趣に生まれ、あるいは聖果を證したとしても、いずれの場合も身体と言葉とところのはたらくきは清浄であつて煩惱に影響されることはない。

3 仏地の一切法自在を証得し、身口意金剛を得證すれば、

4 第八阿頼耶識における煩惱の習気は、金剛のように堅牢で破壊することが困難だが、大空金剛智三摩地によつて、法身毘盧遮那如来を証得することができる」(P六〇七b) というように定義づけられる。

⑦ 毘盧遮那自覚聖智

この〈如来本有清浄法界智〉は、〈無上正等菩提〉であり〈毘盧遮那自覚聖智〉(この概念は『楞伽經』中に折にふれ説かれている。)である。この〈智〉は、『理趣經』第二段「毘盧遮那章」を釈した『理趣釈』のコメントによれば、

「毘盧遮那如来は

1 報身仏(修行が完成することによつて現前する仏)であり

2 色界頂の第四禪色究竟天で〈等正覚〉を成じ、

3 諸菩薩のために〈自証自覚聖智〉を〈四智菩提〉(毘盧遮那如来の特性を四分割して四仏として表現した)として開示した」(P六一〇b) のであるという。

⑧ 八識と四智菩提

また、そこでいわれる〈四智菩提〉は〈四平等現等覚〉であるとして、

「如来の

り  
1 阿頼耶識が大円鏡智と相応し、堅固無漏三摩地を証得して無明の微細煩惱を浄化するのが「金剛平等現等覺であ

2 第七無漏の末那識と第八阿頼耶識中の無漏の種子が能所を離れた結果平等性智を証得するのが「義平等」であり

3 清淨意識と妙觀察智が相応して「一切法本性清淨」を証得するのが「法平等」であり

4 無漏の五識が成所作智と相応して三業の化を現するのが「一切業平等」である。」  
と云うて、八識と四智の相応によつて四智菩提が得られるとしている。

④ 身口意金剛と無上正等菩提

またその境地を体現するためには、身口意金剛を得証せねばならないという。「身口意金剛」とは、『理趣釈』では、「1身印を持つことによって一切の成就を獲得し、

2 語印を持つことによって一切口自在を獲得し、

3 心印を持つことによって一切智々を獲得し、

4 金剛印を持つことによって一切の事業をすべて成就し、はやく無上正等菩提を獲得する。」(P六一三a)とい  
うコンテキストにおいて定義される。すなわち、行者がヨーガの中で1、2、3の行為を模倣することによって、結果的  
に4の境地に到達するというのである。

⑤ 無上正等菩提の獲得とその條件

そして「三昧耶智」を積する段において、「将来最上乘(密教)を修行してその完成をみなかつたものは、師から受  
法しないで、自分勝手に受法したと思ひ込みほしのままに修行したからである。だから、最上乘を修行しようとおも



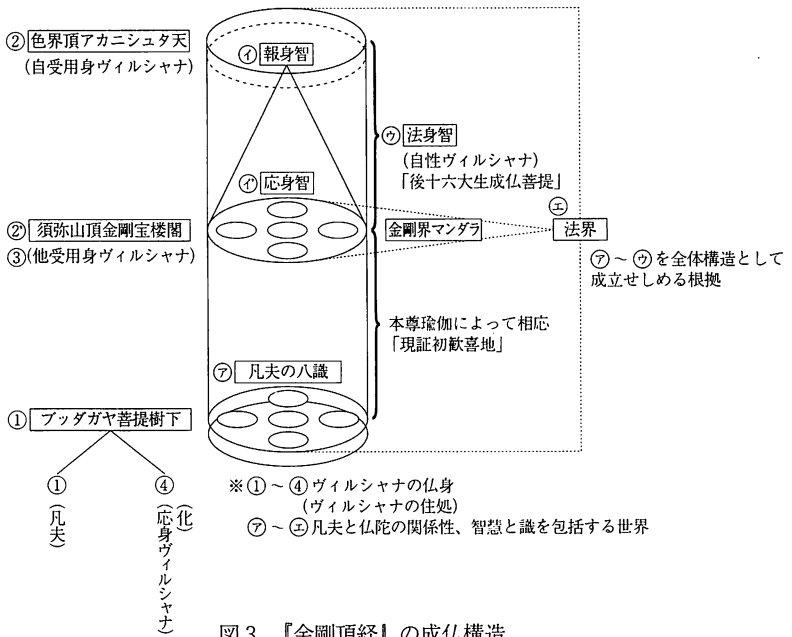


図3、『金剛頂経』の成仏構造  
(『理趣釈』の解釈に拠る)

うものは、必ず師より三昧耶(灌頂)を受けなくてはならない。その後にはじめて修行すべきである。」(P六〇七a、b)として、阿闍梨から弟子へ悟りのエッセンスが、正当な手続きにのつとつた灌頂儀礼を媒介にして伝えられ、弟子はそれ以降、「五秘密瑜伽」を具体的手だてとする(本尊瑜伽)を習修し、八識と四智が相応することによって、(四智菩提)、即ち(ヘビルシヤナ自覚聖智) 〓(ヘビルシヤナ如来の色身)が獲得されることを強調し、灌頂儀礼が密教儀礼上重要な役割(成仏へ向かうキツカケ、あるいは強烈な刺激)を果たすことを注意している。

#### 四、本尊瑜伽

次に、灌頂につづいて本尊瑜伽についてみると、『理趣釈』では十六大菩薩の出生を習修する本尊瑜伽の意義が説かれている。

本尊瑜伽の手続きは、具体的には『理趣釈』中に提出される『大乗不空真実修行瑜伽儀軌』にみられる。

#### ⑦本尊瑜伽の一、

それによれば、

〓修行者、

1 三昧耶等印を結んで本尊瑜伽を成し、

2 四所を加持し、

3 五方仏の加持による印・真言によって灌頂・被甲し、

4 四字明を誦して召入し、縛し、歓喜せしめ、闕伽を献ず。

5 即ち四智印と相応したならば三摩地念誦に入り。

5' 或は瑜伽師マンダラの中位に坐して三摩地中に五秘密マンダラを前の如くに布列し、

6 即ち十七字真言を誦し、

7 心に一一に理趣清浄句を縁じ、

一一に理趣門に入り、

7' 遍く法界に周して、十七尊目にいたって最初にもどりまた始め。

8 心に三摩地を得るをもって限とする」(P六一〇b)

上述の瑜伽法のシステムにのっとって修行すれば現生成仏が獲得されるという。

④ 本尊瑜伽の二、

毘盧遮那理趣會品によれば、

若し瑜伽を行う者が般若理趣(本尊瑜伽)を完成しようとおもったならば、

1 曼荼羅の中央に位置して、毘盧遮那仏の真言 (vajra dhātu an) を誦え、

2 自身本尊瑜伽を行い、

3 四字明を誦して曼荼羅の諸尊をよび寄せ、

4 四出生法を誦え、運心してマンダラの諸尊を一々に出生して、法界に周遍して、(完成しなければ) また始め、

5 五智が相応すれば、念念に諸の宿障・悪業を消滅させることができ、現生に菩薩地を證し、後の十六生に毘盧遮那

仏の無辺なる法身を證成することができる。」(P六二a) という。

⑤ 本尊瑜伽の構造

そして本尊瑜伽の構造は、左記の様に『理趣般若』という聖典として表現された〈ブツダのサトリ状況〉は、三密という手だてを有機的に統合した〈本尊瑜伽〉を実修し、その結果〈八識〉と〈四智〉(あるいは五智)が相応(図3の⑦)④参照)したならば、〈四智菩提〉(ヒルシヤナ自覚聖智を諸菩薩のため四分割して提示したもの)を獲得する〈現証初歡喜地〉ということばに代替されて実現される。

而為説法初中後善 法 諸大菩薩般若理趣

初善 一切如来の身密 一切契印 身威儀 増上戒学

中善 一切如来の語密 真言 陀羅尼 法王教勅 増上心学

後善 本尊瑜伽 一切三摩地無量智解脱 増上慧学

【理趣経】本文では、

その状況を具体的に示したものととして、

離垢清浄。瑜伽法によつて一念に淨心と相応すれば、便ち真如の實際を證す。大悲を捨てずに淨・穢土において受用身・變化身を成仏す。(P六〇八b) のように定義づけている。

④ 瑜伽理趣による四種智印の獲得

また、「何以故一切法自性清浄故般若波羅蜜多清浄」を釈して

一切法は本来清浄であるとはいへ、客塵煩惱の習氣があつて身心を覆蔽しているから六趣に輪廻する。瑜伽理趣・四種智印を獲得することによつて(四種智印とは、いわゆる大智印・三昧耶智印・法智印・羯摩智印である。前の菩薩はそれぞれに四種印を具えている。)相応してまさに離垢清浄を獲得する。便ち普賢大菩薩位を證す。設使(もし)因縁によつて四智印を得られなければ、『経』の所説の様にひとたび聞くことができれば、それによつて勝福を獲得す

ることが出来る。そして疾く無上人菩提を證するのである。それをもって正因としている。」(P六〇九a)

として、「瑜伽理趣」の習修によつて四智印を獲得するのが、普賢大菩薩、すなわち普賢大菩提心・智身大日如来・法身を得ることと同じであるという。これによれば、「現証初歡喜地」と「後十六大成仏菩提」は、「ヒルナシヤナ自覺聖智」を菩薩のために「四智菩提」として表現したことを軌を一にしており、つまりは同じであることが知られる。いずれにしても①灌頂を門となし、②本尊瑜伽を成じ、③最後身にヒルシヤナ身となること（「現証初歡喜地」の段階で実はこれは満足されていることになる。）が瑜伽部密教という成仏であるといえる。

## 五、成仏

「五秘密瑜伽」による成仏実現の構造は、「理趣釈」の「五秘密瑜伽」を主題にすえた「金剛頂瑜伽金剛薩埵五秘密修行念誦儀軌」によれば

顯教では「顯教において修行する者は、三大無数劫を経て後に無上菩提を證成す。其の間には十進・九退す。或は七地にいたつて所集の福德・智慧をもつて声聞・緣覺の道果に廻向す。よつて能く無上菩提を證することができない。」(大正二二五・P五三三五b) というのに対し、密教では、

「若し毘盧遮那仏自受用身所説の「内證自覺證智法」及び大普賢金剛薩埵他受用身の「智」によれば、則ち現生において曼荼羅の阿闍梨に偶逢曼荼羅に入ることを得。為に羯摩を具足し、普賢三摩地を以て金剛薩埵を引入して其の身中に入れ加持の威力によつて、たちまちに無量三昧耶・無量陀羅尼門を證り。弟子俱生の我執・法執の種子を交易し、身中に一大阿僧祇劫に所集せる福德・智慧を集得する。そして、仏家に生在す。其の人は、一切如来の心より生じ、仏の口より生じ、仏の法より生じ、法化より生じ、仏の法財を得（法財とは、いわく三密・菩提心の教法なり）わず

かに曼荼羅をみれば、たちまちにおいて淨信する。歡喜心をもって瞻觀するからである。則ち阿頼耶識において金剛界の種子を種え、灌頂受職して金剛名号を受ける。これより以後、廣大甚深不思議法を受得して二乗・十地を超越す」といって「仏受用身の智」にもとづく灌頂をはじめとする一連の儀礼があり、その儀礼を体験すれば、仏の加持力によって表現された所作が受者に影響して、成仏することが確定（授記）されるという。その灌頂に続いて、師より授与された〈本尊瑜伽〉の実践によって図1、図2にみられる様に成仏が達成されるというのである。

大師の成仏論の典拠

大師は『御請来目録』において、

「・・・我に授くるに発菩提心戒をもつてし、我に許すに灌頂道場に入ることをもつてす。受明灌頂に沐すること再三なり。阿闍梨位を受くること一度なり。・・・兩部の大法を学び、諸尊の瑜伽を習う。此の法はすなわち諸仏の肝心、成仏の経路なり。・・・」（弘全第一輯、P六十九）として、「灌頂」、「瑜伽」、「成仏」の構造が、不空↓惠果直伝の密教法門における成仏実現のための実践儀礼であることを強調している。

そして、「・・・またそれ顯教はすなわち三大の遠劫を談じ、密藏はすなわち十六の大生を期す。遅速勝劣はなを神通と跛驢との如し。仰善の客、庶くはその趣きを悟れ。教の優劣、法の濫觴は『金剛薩埵五秘密儀軌』および『大弁正三蔵の表答』等の中に広く説くがごとし。」（同第一輯、P八十三〜八十四）

また「・・・必ずまさに福智兼ねて修し、定慧並びに行じて、いましよく他の苦を濟い、自の業を取るべし。定を修するに多途にして遅あり速あり。一心の利刀をもてあそぶは顯教なり。三密の金剛を揮うは密藏なり。二心を顯教に遊ばしむれば、三僧祇眇はるかなり。身を密藏に持すれば、十六生甚だ促かなり。頓が中の頓は密藏これに当れり。・・・」（同、P百二）として、「十六大生」＝「本尊瑜伽」の有効性を述べた。

さらに『秘密曼荼羅教付法伝』巻第一（「弘大全」第一輯、P5）では、

「……第二の祖……法身如来の海会に対して灌頂の職位を受く。すなわち自証の三密門を説いて、もつて毘盧遮那及び一切如来に献じて、すなわち加持の教勅を請う。毘盧遮那智如来のいわく、汝等将来に無量の世界において最上乘者のために現生に世・出世間の悉地成就することを得せしめよ……」（『金剛頂瑜伽分別聖位法門』大正蔵八七〇P二八八・上の引用）として、不空の灌頂に対する所論を引き、「灌頂」がビルシャナ如来によって加持された儀礼であり、その目的は、密教を志向するものを現在生きている間において「成仏」させることにあるとする。

この時点において大師の成仏実現の手だては、当然の如く師匠の恵果により受法した法門であり、その理論的根柢は、上述の『五秘密儀軌』や、不空三蔵の書翰の収められた『表制集』に求められている。ここでもやはり「灌頂」、「瑜伽」、「成仏」という「構造」が踏襲化されていることが知られる。

以上、「理趣釈」中の記述を手がかりとして、恵果を経由して空海が伝えた不空の瑜伽部密教の密教儀礼の構造を確認してきた。現在までに知られたことは、灌頂を入門とし（灌頂を受ければ金剛薩埵の因位）、本尊瑜伽を修習し（完成すれば金剛薩埵の果位）、三密・四智印が相応したならば、成仏＝ビルシャナ色身を獲得するということである。

それは、一切如来の自覚聖智（＝四種智印＝清浄法界智）を得ることだとされており具体的には、有情の身中に本の如来蔵性としてそれが蔵されており、灌頂・加持・瑜伽によって刺激すれば、それが顕在化してくるということである。その刺激をまっさき与えるのが灌頂儀礼であり、またこの儀礼によって成仏保証が与えられるということであった。

「仏陀のサトリ」

「仏陀のサトリ追体験の構造」

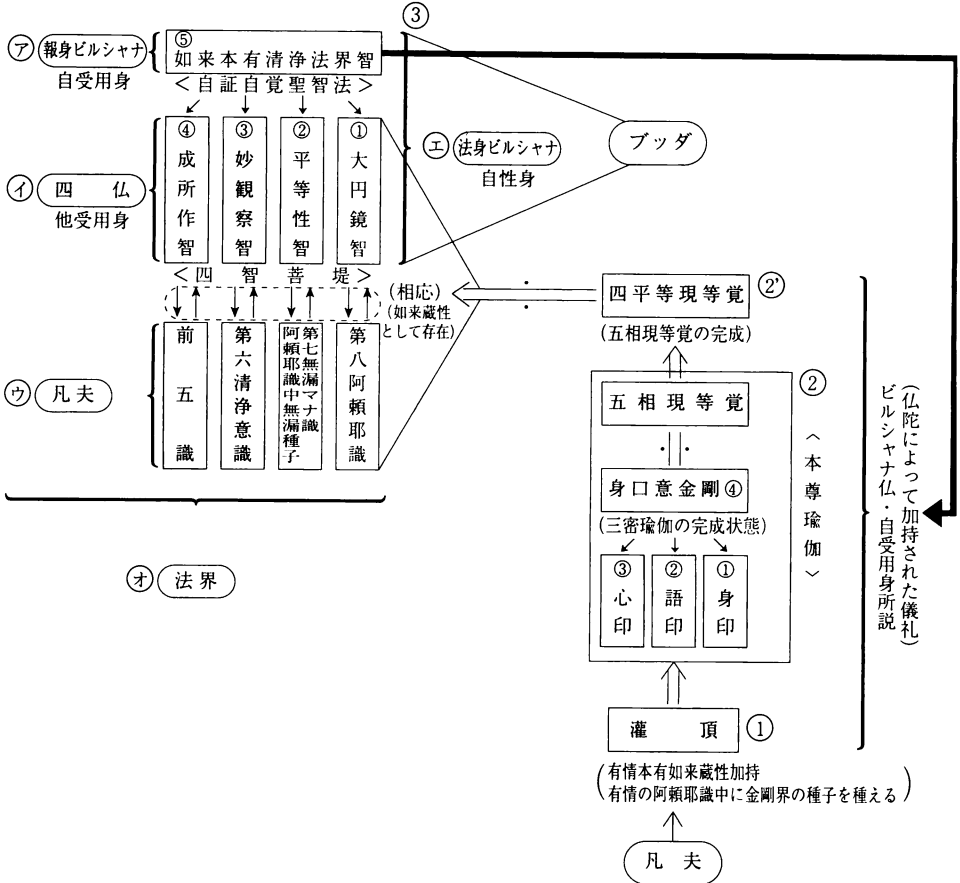


図 4